

小・中学校におけるキャリア教育の授業開発に関する考察

川上 知子

要旨：本稿は、筆者が公立中学校の教員として、2014年度教育センターでキャリア教育をテーマに仮説検証授業を行った際に書いたレポートの理論部分の内容を更新し、さらに小学校の視点を加え、再整理したものである。学校教育において「キャリア教育」が漠然とした理解のまま進められている現状を踏まえ、「キャリア教育」をどう捉え、具体的にどのような教育実践を行っていけばよいのかを検討、提案することを目的としている。具体的には、学級活動におけるキャリア教育の視点を踏まえた授業開発を目指し、まず、キャリア教育の視点である基礎的・汎用的能力の4つの能力の位置付けを「キャリア教育の手引き（文部科学省、2011年）」に基づいて整理している。理論的整理から授業を開発する流れの一事例を提案することで、学校教育におけるキャリア教育への理解を深め、小・中学校でキャリア教育の視点が意識化された授業実践の推進を目指すことで、たくましく自分の人生を生き抜く子どもたちの育成につなげていきたい。

キーワード：キャリア教育の視点、基礎的・汎用的能力の位置づけ、授業開発、学級活動

1. 問題と目的

2011年1月中央教育審議会答申における「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」では、目標とする進路が達成できない場合などが多々あるにもかかわらず、経済・社会・雇用の仕組みについての知識や様々な状況に対処する方法を十分に身に付けていない若者が多いと指摘されており、社会の現実を視野に収めた積極的なキャリア教育の必要性に言及している。そして、これまでのキャリア教育の現状を踏まえ、キャリア教育の視点として「基礎的・汎用的能力（包括的な能力概念）」が提示された。この「基礎的・汎用的能力」は、4つの能力（「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」）で構成され、相互に関連・依存した関係にあり、各学校がそれぞれの課題を踏まえて、具体的に4つの能力を育成する場を設定し、工夫された教育を通じて達成されることが望ましいとされている。

しかしながら、2013年3月に国立教育政策研究所から発行された「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」における生徒調査では、自分の将来の生き方や進路について考えるため、どのようなことを指導して欲しかったかという問いに対して、「自分の個性や適性を考える学習」の割合が39.3%と最も高く、次いで「就職後の離職・失業など、将来起こり得る人生上の諸リスクへの対応」が32.1%という結果であった。さらに、学校調査の「キャリア教育に関する学習の機会や内容等の実施状況」の項目において、「就職後の離職・失業など、将来起こり得る人生上の諸リスクへの対応に関する学習を実施していない」と回答した割合が8割を超えていた。このことは、進路指導の実践における課題の一つを示すものであり、キャリア教育の視点を踏まえた授業実践の開発が必要であると考える。

平成29年に告示された中学校学習指導要領解説総則編では、以前の「進路指導の充実」に代わり「キャリア教育の充実」の項となり、学習指導要領に初めて「キャリア教育」が明示された。同時に、学校教育におけるキャリア教育に関する課題を、「キャリア教育の理念が浸透してきている一方で、これま

で学校の教育活動全体で行うとされてきた意図が十分に理解されず、指導場が曖昧にされてしまい、また、狭義の意味での「進路指導」と混同され、「働くこと」の現実や必要な資質・能力の育成につなげていく指導が軽視されていたりするのではないかと、といった指摘もある」と明示した。また同時に、同年の小学校学習指導要領解説総則編の「キャリア教育の充実」の項においても同じ内容が示されているが、「特別活動において進路に関連する内容が存在しない小学校において、体系的に行われてこなかった」という課題を追記している。これらのことから、小・中学校ともに、キャリア教育という理念が浸透してきてはいるものの、「キャリア教育」という意識のもと具体的な教育実践がなされていないという現実的課題があると考えられる。

そこで本研究では、キャリア教育の視点である基礎的・汎用的能力の4つの能力の位置づけの具体例を示すことで、キャリア教育への理解を深め、具体的な授業開発のための流れを提案することを目的とする。

2. 学校教育における「キャリア教育」の理論的整理

(1) 進路指導とキャリア教育との関係

「中学校キャリア教育の手引き」(文部科学省, 2011)は、本来の進路指導は、卒業時の進路をどう選択するかを含めて、更にどういう人間になり、どう生きていくことが望ましいのかといった長期的展望に立って指導・援助するという意味をもつ教育活動だと整理されている。一方キャリア教育は、就学前段階から初等中等教育・高等教育を貫き、また学校から社会への移行に困難を抱える若者を支援する様々な機関においても実践されるものであり、自らの力で生き方を選択していくことができるために必要な能力や態度を育てることを目指すものだと示された。これらのことを踏まえ、進路指導とキャリア教育との関係が図1のように示されており、進路指導はキャリア教育の一環として行われる必要があると考える。しかし、キャリア教育自体があまりに大きな概念であることから、進路指導をキャリア教育の視点で実践するに当たって具体的なイメージをもちづらい現状であるといっても過言ではない。そこで、2011年1月中央教育審議会答申において示された、キャリア教育の視点である基礎的・汎用的能力について整理することとする。

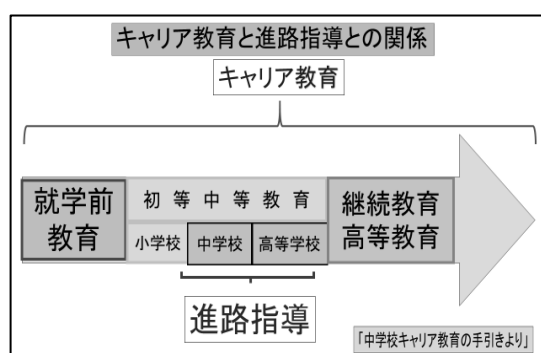


図1 進路指導とキャリア教育との関係
(文部科学省, 2011: 川上(2014)による整理)

進路指導とキャリア教育との関係が図1のように示されており、進路指導はキャリア教育の一環として行われる必要があると考える。しかし、キャリア教育自体があまりに大きな概念であることから、進路指導をキャリア教育の視点で実践するに当たって具体的なイメージをもちづらい現状であるといっても過言ではない。そこで、2011年1月中央教育審議会答申において示された、キャリア教育の視点である基礎的・汎用的能力について整理することとする。

(2) キャリア教育の視点 —基礎的・汎用的能力の4つの能力と具体的な要素—

キャリア教育の視点として示された基礎的・汎用的能力は、「人間関係形成・社会形成能力」、「自己理解・自己管理能力」、「課題対応能力」、「キャリアプランニング能力」の4つの能力によって構成される。さらに、4つの能力は、包括的な能力概念で、それぞれが独立したものではなく相互に関連・依存した関係にあるとされ、各学校において、実態と課題を踏まえて4つの能力の具体的な要素を設定し、工夫された教育を通じて育成されることが望ましいと示された。「中学校キャリア教育の手引き」を基に、それぞれの具体的な要素例について整理したものが表1である。

表1 基礎的・汎用的能力の4つの能力と具体的な要素例

(文部科学省, 2011: 川上(2014))

基礎的・汎用的能力	具体的な要素例
人間関係形成・社会形成能力	他者の個性を理解する力, コミュニケーション・スキル, チームワーク等
自己理解・自己管理能力	自己の役割の理解, 忍耐力, 前向きに考える力等
課題対応能力	本質の理解, 課題発見, 計画立案, 評価・改善, 実行力等
キャリアプランニング能力	学ぶこと・働くことの意義や役割の理解, 多様性の理解, 将来設計, 選択等

一方、2013年の「キャリア教育・進路指導に関する総合実態調査第一次報告書」に、学校調査における基礎的・汎用的能力の指導状況が示された。これによると、第1学年での「課題対応能力」と「キャ

リアプランニング能力」の育成に関する授業・指導だけが8割を超えていない状況で、それ以外の内容については、どの学年も8割を超える割合で指導されていた。その反面、「教師の指導と生徒のキャリア発達との差異について」において、学級担任調査と生徒調査を比較したものが示されており、学級担任が生徒のキャリア発達には重要だと考え、それぞれの具体的な要素に関して指導していることが、必ずしも生徒のキャリア発達に結び付いていないことが明らかになった。このことから、教師のみが、基礎的・汎用的能力の4つの能力を理解し、題材を指導するのではなく、生徒自身に対してもその意図を明確に示し、学習活動を行わせていく必要があると考えた。

(3) キャリア教育の視点である基礎的・汎用的能力(4つの能力)の位置付けの提案

授業を開発するにあたり、キャリア教育の視点である基礎的・汎用的能力(4つの能力)の位置付けを検討する必要があると考えた。そこで、基礎的・汎用的能力の4つの能力の関係性を考えることとする。前述したように、4つの能力は、包括的な能力概念で、それぞれが独立したものではなく相互に関連・依存した関係にあるとされ、各学校において、実態と課題を踏まえて4つの能力の具体的な要素を設定し、工夫された教育を通じて育成されることが望ましいと示されている。これらを平たく整理したものが図2である。つまり、学校に委ねられているため、本研究では、1つの位置づけ例を示すこととする。

「中学校のキャリア教育の手引き」(文部科学省, 2011)では、「自己理解・自己管理能力」がキャリア形成や人間関係形成における基盤となり、特に「自己理解能力」は、多様なキャリアを形成する過程で、生涯にわたって常に深めていく必要があるものと示されている。また、「人間関係形成・社会形成能力」に関しては、人や社会との関わりによって、自分にとって必要な知識や技能等に気付かされるものであり、「課題対応能力」が、自らが行うべきことを意欲的に取り組むために必要な能力であると示されている。

これらの関係性を踏まえ、キャリアを形成していくに当たって、「自己理解・自己管理能力」を柱とし、その土台として「人間関係形成・社会形成能力」を据えた。また、人や社会との関わりの中で、自己の役割を自覚することが、「キャリアプランニング能力」の育成につながると考えた。そこで、課題を発見・分析し、処理する「課題対応能力」が、「自己理解・自己管理能力」と影響し合う中で将来に対する切実感が増し、「キャリアプランニング能力」の育成が促されるものと考えた。本研究では4つの能力の育成が循環されるものと捉え、図3のように位置付け、1つの例として提案する。

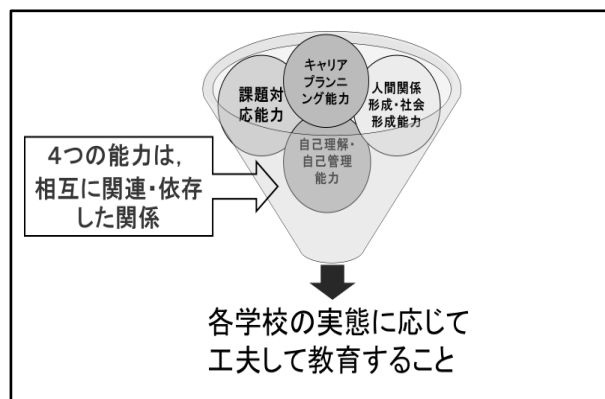


図2 4つの能力の位置づけに関するイメージ図
川上(2014)

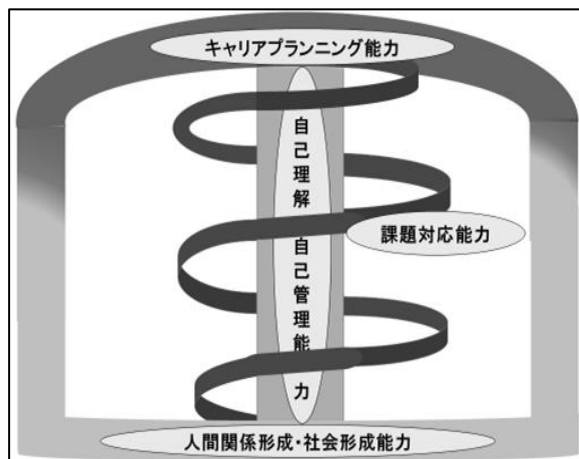


図3 基礎的・汎用的能力(4つの能力)の位置付け(例)
川上(2014)

3. 授業開発の実際

これまでの理論整理を踏まえ、筆者が実際に中学校第1学年の1学級を対象に授業開発し、検証授業を

行ったものを通して、授業開発の流れの一例を示すこととする。

(1) 実態把握について

まず、授業を開発するにあたり、学級の実態を把握することが重要となる。これまでの理論的整理を土台とし、キャリア教育で培っていききたい力と生徒・学級の実態をブレンドして、具体的な題材を選択、決定していく。学級や生徒の実態を把握するための参考資料として、「中学校キャリア教育の手引き」(文部科学省, 2011) に示されている「キャリア教育アンケートの一例」を発達段階に応じて表現を若干修正し、表2を作成した。このアンケートは、基礎的・汎用的能力の4つの能力が視点となった全12項目、4件法で構成されている。ちなみに、小学校のキャリア教育の手引きにおいても同じアンケートが示されている。子どもたちの発達段階に応じ、言葉をわかりやすくして使うことが可能である。しかしながら、研究という視点で厳密に項目内容をみると、

表2 キャリア教育アンケートの一例(中学1年生対象)「中学校キャリア教育の手引き」を参考に川上(2014)作成

観点	アンケート項目	選択肢			
人間関係形成・社会形成能力	①友だちや家の人の意見を聞くとき、その人の考えや気持ちを受け止めようとしていますか。	4	3	2	1
	②相手が理解しやすいように工夫しながら、自分の考えや気持ちを伝えようとしていますか。	4	3	2	1
	③自分から役割や仕事を見つけたり、分担したりしながら、周囲と力を合わせて行動しようとしていますか。	4	3	2	1
自己管理・自己理解能力	④自分の興味や関心、長所や短所について、把握しようとしていますか。	4	3	2	1
	⑤気持ちが沈んでいる時や、あまりやる気が起きない物事に対する時でも、自分がすべきことには取り組もうとしていますか。	4	3	2	1
	⑥不得意ことや苦手なことでも、自ら進んで取り組もうとしていますか。	4	3	2	1
課題対応能力	⑦分からないことやもっと知りたいことがある時、自分から進んで資料や情報を収集したり、だれかに質問をしたりしていますか。	4	3	2	1
	⑧何か問題が起きた時、次に同じような問題が起こらないようにするために、何をすればよいか考えていますか。	4	3	2	1
	⑨何かをする時、見通しをもって計画的に進めたり、そのやり方などについて改善を図ったりしていますか。	4	3	2	1
キャリアプランニング能力	⑩学ぶことや働くことの意義について考えたり、今学校で学んでいることと自分の将来とのつながりを考えたりしていますか。	4	3	2	1
	⑪自分の将来について具体的な目標をたて、その実現のための方法について考えていますか。	4	3	2	1
	⑫自分の将来の目標に向かって努力したり、生活や勉強の仕方を工夫したりしていますか。	4	3	2	1

4:いつもしている 3:時々している
2:あまりしていない 1:ほとんどしていない

2つの事柄が並列して訊ねてあり、回答者に迷いを与えてしまう表現となっている。そのため、この質問項目については精査していく必要があると考える。ただ、実態を参考程度に把握するというのであれば、現場の負担を軽減する上でも、すでにあるものを有効活用したいところである。このアンケートの選択肢を数値化(1項目1点、12点満点)して集計し、事前・事後アンケートとして用いることで学級や個人を把握する参考資料となり、授業を開発するための重要な材料となる。

(2) 題材の概要と指導計画

特別活動の学級活動「(3)一人一人のキャリア形成と自己実現」の「ア 社会生活、職業生活との接続を踏まえた主体的な学習態度の形成と学校図書館等の活用」, 「ウ 主体的な進路の選択と将来設計」を受けて、「課題対応能力」を軸に題材の指導計画を考案することとした(図4)。「課題対応能力」の「本質的理解」や「課題発見」等の要素を軸とし、実在する人物が直面した困難について対処するための最善策を、話し合い活動を通して考えさせることとした。題材で取り扱う実在する人物については、直面した困難を、模索しながらも乗り越えて生きている人物を選択した。題材で扱う人物については遠く感じる



図4 題材の指導計画(例)川上(2020)川上(2014)を加筆修正

人材から身近な人材へと時数が進むごとに移行することで、自己への深化を促すことを狙いとする。第1時、第2時、第4時で、題材の人物が直面した困難について、「人間関係形成・社会形成能力」を意識し、話し合い活動を通して考えさせるようにする。題材の人物の生き方を踏まえ、第3時、第5時においては、「自己理解・自己管理能力」を意識し、生徒自身の将来や生き方と向き合わせるために、中学校卒業後の具体的な進路選択について考えさせるようにした。そして、生徒自身に自分に置き換えて考えさせるために、題材で取り扱う人物と同様な人生上の諸リスクを想定したワークシートを作成した。また、ワークシートを作成する際は、具体的な実践を取りまとめた仙崎(2001)の著書「中学生の進路力を育てる総合的な生き方の学習プラン」を参考にした。さらに、第3時の後に個別指導としてのキャリアカウンセリングの場を設定することで、授業では把握が難しい、生徒の葛藤も含めた心の動きや生き方についての思考の深さを把握するとともに、生徒自身の中に芽生えているキャリア意識を高めることをねらいとした。

(3) 授業展開について

生徒に、多様な生き方があることを気付かせたり、自分の将来について具体的に考えさせたりすることを指導の軸とした。さらに、将来起こり得る人生上の諸リスクに対する他者の生き方を知ることを通して、人生上の諸リスクへの対処方法を含め、今の自分に必要なことなどを考えさせることができると考えた。これらを踏まえ、具体的な手立てを次の3つとした。

- ① 直面した困難を模索しながら乗り越えて生きる実在する人物にインタビューを行う。その内容を、「出会い」「困難との遭遇」「人生の選択」の3つの視点によるスライドを作成するなどして、図5のような学習の流れで授業を展開する。
- ② 話し合い活動の場面では、自分の考えを記入した付箋を用いて、その班の最善策を考えさせる。
- ③ 生徒に基礎的・汎用的能力を意識させるために、生徒に分かりやすい言葉に変換し、4つの能力を毎時間提示する。

※基礎的・汎用的能力→「進路力」

→自分らしくたくましく生きる力

人間関係形成・社会形成能力→「つながる力」

自己理解・自己管理能力→「自分力」

課題対応能力→「アイディア力」

キャリアプランニング能力→「未来力」

なお、本稿では詳細を論じないが、③に関してひらがな表記とし、力についての丁寧な説明を加え、小学校1年生、小学校3年生で他の題材における授業開発を行った。低学年であればあるほど、定着が早く、日常会話で使う子どもたちが多く見られた。また、ユニバーサルデザインの視点も意識し、授業の流れを図5のようにパターン化した。パターン化することで特別支援を要する生徒たちはもちろんだが、進路に対する不安を感じやすい生徒にとっても心の準備がしやすいのではないかと考えた。

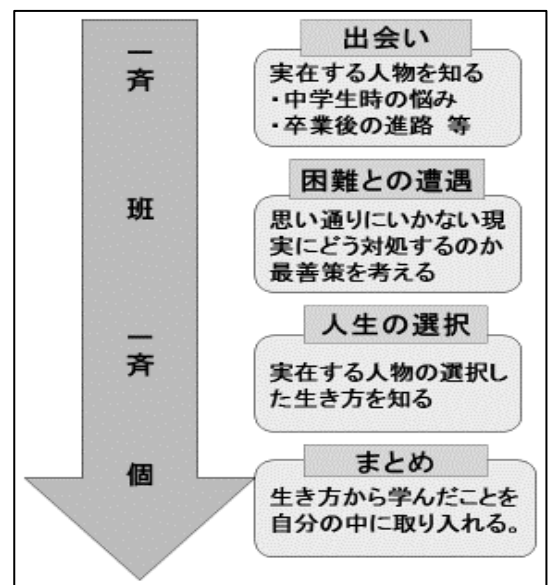


図5 授業の展開（例）川上（2014）

4. 成果と課題

本稿の成果としては、漠然とした理解にとどまるキャリア教育を、キャリア教育の視点である「基礎

小・中学校におけるキャリア教育の授業開発に関する考察

的・汎用的能力」の4つの能力の位置づけの提案を踏まえ、授業開発の概要を具体的に示すことができた点である。小学校、中学校共に、学習指導要領の改訂に伴い、道徳の教科化をはじめ、教育実践に新たな視点が加わり、学校現場は多忙極まりない現状にあることは否めない。そのような中、日々の教育実践に教師の意識と児童生徒の共通意識を加え、日々継続して実践を行うだけでも、小さな成長への変化を生むことにつながると考えている。

一方、今後の課題としては、小学校段階からの系統的なキャリア教育の在り方を検討することである。教科教育にキャリア教育の視点を踏まえた実践は行われているが、「生き方」をメインとし、特別活動を要とした教育実践はまだ少ないと言える。今回は、中学校1年生を対象に「課題対応能力」を軸とした題材計画を踏まえた授業開発を提案したが、当然、他の能力を軸に題材計画を考案することも可能である。発達段階に応じて、この軸となる能力を変えることがよりよいキャリア形成を促すことも考えられる。また、今回は詳細に触れていないが、これまで、小学校1年生、3年生の実践経験があり、1年を通してキャリア教育を意識して実践することの教育的意義を、実に主観的ではあるが実感している。まずは、この個人レベルの実感を、今後、転用可能な実践事例として理論的な整理に基づき、提案することも今後の課題の一つである。色々な可能性を秘めたキャリア教育の魅力を、授業提案の積み重ねを通して伝えることも、個人的な目標であるが、課題としたい。

【引用・参考文献】

- 中央教育審議会答申(2011). 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf (最終閲覧日:2020年2月27日)
- 国立教育政策研究所(2013). キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査 第一次報告書
https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/career_jittaityousa/career-report.htm (最終閲覧日:2020年2月27日)
- 川上 知子(2014). 中学校進路指導「自己の進路を主体的に考える生徒を育成するために、学級活動において、キャリア教育の視点を踏まえた進路指導の在り方を探る」佐賀県教育センター長期研修事業 http://www.sagaed.jp/chouken/choukikenshuu_jigyuu/chouken_report/h26/h26zentai.html
(最終閲覧日:2020年2月27日)
- 文部科学省(2018). 小学校学習指導要領解説 総則編 東洋館出版社, 101-102.
- 文部科学省(2010). 小学校キャリア教育の手引き 教育出版
- 文部科学省(2018). 中学校学習指導要領解説 総則編 東山書房, 99-101.
- 文部科学省(2018). 中学校学習指導要領解説 特別活動編 東山書房, 57-61.
- 文部科学省(2011). 中学校キャリア教育の手引き 教育出版
- 仙崎 武監修(2001). 中学生の進路力を育てる総合的な生き方の学習プラン 実業之日本社